

LA COMÉDIE HUMAINE



ク　ツ　ザ　ル　バ
集　　全

卷　三　第

皇　親　派　學　生　五　地

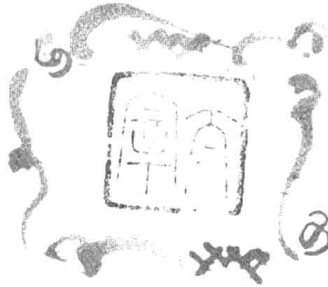
滅　　幻

京　　菴

版　房　書　出　河

昭和十年六月二十五日印刷
昭和十年六月三十日發行

巴 札 ツ ク 全 集
第 三 卷



翻
譯
者

發
行
者

發
行
所

每卷會費 金貳圓五拾錢

(豫約申込者ノミニ頒布ス)

太 宰 施 門
丸 山 和 馬
森 本 文 雄
宮 本 正 清

河 出 孝 雄
東京市日本橋區通三丁目一番地

河 出 書 房

東京市日本橋區通三丁目一番地
振替東京一〇八〇二番
電話日本橋二七七七番

印刷所 宮本印刷所

製本所 寺田製本所



青年時代のバルザック

(ドゥヴァエリア筆)



第二部 田舎の偉人……劇場にて（本文315頁）

SCÈNES DE LA VIE DE PROVINCE.

ILLUSIONS PERDUES

TOME PREMIER

幻

滅

(上卷)

宮 森 丸 太

本 本 山 宰

正 文 和 施

清 雄 馬 門

ヴィクトル・ユーゴー氏に

ラファエルやピットの如き天賦の才質によつて、弱冠にして既に大詩人になられた貴下は、シャトープリャンやそのほか總ての眞に才能ある人々と同様に、新聞紙の柱陰に待伏したり地下に潜伏したりする嫉妬の徒輩を相手にして闘つて來られたのである。されば余は勝利に輝く貴下の名が、貴下に獻ぐるこの著作の戰勝を助くるに至らんことを切望する。

ある人々の言によれば、この作品は眞理に満ちた物語といふよりは、寧ろ勇氣なる行動の記録といふべきものの由である。一體ジャーナリストは侯爵、理財家、醫者、檢事等と同様、モリエールとその劇とに屬して可なるものではなかつたらうか。果して然らば笑はせながら風俗を矯正する「人間喜劇」は、巴里の新聞雜誌がいかなる權力者をも例外なく取扱つてゐるこの際、このジャーナリストといふ有力な一部門を例外として取扱はぬな

どといふことができやうか。

貴下の誠實なる禮讀者にして友人たることを光榮としつつ――

ドッ
・
バル
ザッ
ク

バルザック全集・第三卷・目次

幻

滅

上卷

宮 森 丸 太

本 本 山 宰

正 文 和 施

清 雄 馬 門

獻 辭

第一部 二人の詩人……………一

第二部 巴里における田舎の偉人……………二〇五

譯者の言葉

第一部 二人の詩人

この物語の始まる頃には、スタンホープ印刷機や着肉ローラーなどは地方の小さい印刷所ではまだ運轉されてゐなかつた。巴里の大きな印刷所とは同じ道のつながりをもつてゐるに拘らず、アングレームの町では、「印刷機を唸らせる」といふ古い文句の生みの親であるあの木製の印刷機が、いまだに使用されてゐた。時代おくれのこの地の印刷所では印刷インキを擦り込んだ皮のロールをもつて印刷機械工の一人が活字にインキを押し附けるといふ古い方法がなほ用ひられてゐた。印刷紙があてがはれる活字のいつばいにつまつた版をのせる不定着の臺板はいまだに石造のものであつて、その臺をマルブル（大理石）と呼ぶのも故あることと思はれた。この機械仕掛はいろいろ不完全な點があつたに拘らず、エルゼヴィエとかブランタンとかアルドとかディドとかいふ立派な版本を出した由緒のあるものであるが、今日ではあの貪婪な印刷機關の犠牲となつて全く忘れ去られてゐるから、特にここに記し留めておく必要があるのである。いはんやこの古くさい道具がジェローム・ニコラ・セシャルに殆ど迷信的に愛玩され、且つまたこの大きな小説の中で立派な一役を演じてゐるに於ておやである。

このセシャルといふのは、もとは、印刷屋の隠語で文選工から熊と呼ばれる印刷工であつた。印刷工がインキ入れから印刷機へ、印刷機からインキ入れへと往復する運動がいかにも檻の中の熊に似てゐる

るので、さてこそこの綽名を戴くこととはなつたのである。その代りに、こんどは熊が植字工を猿と呼ぶやうになつた。といふのは、この連中が百五十二の小さい仕切の中にはひつてゐる活字を取り出す絶へざる動作が猿公そつくりだからといふのである。

千七百九十三年といふ災難な時節に、セシャルは五十そこそこの年で結婚した。さうしてその年齢と結婚とのお蔭であらゆる労働者を殆ど残らず軍隊に拉し去つたあの徴集から免れたこの老印刷工は、別名を無心といふこの印刷所の主人が子供もなくただ後家一人を残して死んで行つたその後に、ひとり取り残されたのである。建物は今にも壊れさうな様子であつた。ひとりばつちの熊は猿に變身することができなかつた。それもその筈で、もともと印刷屋の身の上、読み書はからつきし駄目であつた。ところがセシャルの無能力さにはお構ひなく、國民議會コングレガシヨの堂々たる命令書を布告することを督促された一人の人民代表が、印刷工セシャルを印刷長に任命して、その印刷所を徵發した。この危険な辭令を受けてから、市民シビヤンのセシャルは、賠償の意味で前の主人の未亡人に妻の貯金を渡し、それでこの印刷所の道具類をその半値で買收した。しかしそれは何でもない事だつた。問題なのは間違もなく遲滯もなく共和派の命令書を印刷せねばならぬ事であつた。この困難な折も折ジエローム・ニコラ・セシャルは幸運にもマルセイユ出身の一貴族にでくはした。それは外國に移住して自分の所有地を沒收されるのも嫌、顔を出して首を切られるのも嫌、それでゐて何かして働かなければバンが得られないといふ境遇にある人であつた。そこで遂にこの貴族のモーコンブ伯爵が田舎の印刷所の校正係のみすばらしい上衣を

着て、植字をし、読み、校正した。しかもその印刷物はいふと、貴族を圍まふ市民は死刑に處すといふ命令書であつた。無心になりあがつた熊がそれを刷つて貼出させた。かうして二人が二人とも無事息災にをさまつたのであつた。

千七百九十五年に、恐怖時代も驟雨の如くに過ぎ去つたのち、ニコラ・セシャルはまたもや植字工と読み直し役と校正係との三役を兼ね得る萬能役者を見出さねばならなかつた。後に王政復古時代に司教になつたが、この當時は誓言を拒んでゐて、まだ司祭であつたのが、モーコンブ伯の代りとなつて、第一次執政官時代ミエロンスユルに加特力教が再興されることになつたその日までこの印刷所で働いた。この伯爵と司教とは後になつて貴族院の同じ椅子で顔を見合はせることとなつた。千八百二年に、ジェローム・ニコラ・セシャルは読み書きのできぬ點では千七百九十三年頃とは別に變りはなかつたが、校正係を一人備へる位のもとは既に十分にしこためてゐた。自分の將來に全く心配のないこの職工上りは、手下の猿や熊達にとつてとても恐ろしい人間となつてゐた。吝嗇といふものは貧困の終るところで始まるものである。この印刷屋が自分に一財産できる見込みのついたその日から、急に利害の念に聰くなつて、自分の職業の物質的な方面に貪慾な、邪推深い、透徹な眼識を向けるやうになつた。實地の力が理窟をそつちのけにするのであつた。到頭最後には、一頁あるひは一枚の代價などは活字の種類にしたがつて一目の睨みで利かすといふ仕末であつた。何も知らぬお客には大きな活字は細字よりも組賃が高くつくと言つて納得させ、反對に小さい活字の場合には大きな活字よりも取扱ひ難いと言ふのであつた。さて植字のこ

とは印刷作業の全班のうちで彼には全くわからない部分であつたから、うつかり間違ふことを恐れて、ただ自分にだけ多くの利益があるやうにしようといふの一手であつた。植字工が時間給で働いてゐるやうな場合には、眼を植字工から離さないといふ方法である。どこかの製紙業者が困つてゐることを知ると早速その人から紙を二足三文で買取つて庫に藏つておくといふ風であつた。こんな譯で、もうこの時代から、彼は、印刷機がいつの昔から据附けられてゐるのかもわからないといふ老舗をわがものとしてゐたのである。それにまたありとあらゆる幸福に恵まれた。妻は死ぬし、子供は男の子が一人といふ幸運さであつた。その子を町の中學リセに入れたが、それも教育を授けるよりは、自分の後繼ぎをこしらへておかんが爲であつた。彼はまたその子に對してなかなか嚴格で、永く父の權利を持ち續けようとするのであつた。それで休みの日などには、子供に活字盤に向つて仕事をさせ、自分で食ひ扶持をかせいでいつかは父に御恩返しをするのだぞ、父はお前を育て上げるのに血の出るやうな苦勞をしたのだからな、と言ひ聞かせるのであつた。

さて司祭が出て行くと、セシャルは校正係として、四人の植字工のうちから、未來の司教がこれから正直で利發だと折紙をつけた男を選び出した。かくて、セシャルの爺父にも今一息で幸運の時がめぐつて來て、息子が印刷所を管理し、印刷所が若い者の器用な手で繁昌しようといふ所にまで漕ぎ付けた。息子のダヴダヴはアングーレーム中學で最優秀の成績を上げた。熊は智識もなく教育もない只の成り上り者であつたから、學問などはひどく輕蔑してゐたが、それでも息子を巴里に出して高等印刷術を

研究させたのである。しかし息子には、巴里は働き人の極樂世界だからうんとお金を蓄めるのだぞ、親の財布をあてにするやうではいかぬぞと強く言ひ含めたので、息子も無論この智の國に行つて滞在することをもつて目的達成の手段と考へるやうになつた。それでダヴィッドは、片手間に職を習ひながら、巴里での教育を終へたのである。デイドの店で働いてゐた校正係が、一かどの學者となつたのである。千八百十九年の末、ダヴィッド・セシャルは、滞在中鏢一文も親父にかけずに過して來た巴里を後にして、息子の手に事業の棧を委ねようと思つて彼を呼び寄せた親父のもとに歸つて來た。

ニコラ・セシャルの印刷所は、この縣で只一つの司法關係の公報を引受け縣廳や司教職からも御用を承つてゐたので、この三つの顧客から大儲けをすることは若い元氣な者の手で容易にできる筈であつた。

ちやうどその頃、コアンテ兄弟といふ製紙業者が、アングレーム居住の者に與へられた第二號の印刷屋開業免狀を買ひ取つた。それを手放した印刷屋といふのは、帝政期の軍事的非常時にすべての工業的活動が抑壓されたのをよいしほにして、セシャル老人が全く手も足も出ない狀態に押込めてしまつた印刷屋であつた。そんな事情で、セシャル老人はそれを買ひ取らなかつたのであるが、僅かの金を惜んでそれを買はなかつたことが、後に彼の老舗の没落の原因となつた。さて、コアンテ兄弟が買つたといふことを知つて、セシャル老人は、自分の店とコアンテ兄弟との間に起る競争は、ひとつ息子にやらせよう、自分の出る幕ぢやないから、といふ愉快な考へを起した。

「俺ぢや敗け戰となるかも知れぬが、デイドの店で仕込まれた息子の腕でなら其處はうまくやりをらう

て

七十の翁のセシャルは自分の思ひに適つた生活ができる時を渴望してゐるのであつた。彼は高等印刷術には殆ど全く盲目であつたが、その代り彼が實に達者だと噂されてゐたのは勞働者たちが串戯に飽醉術と呼びなしたあの道の腕前に於てであつた。この道はかの『パンタグルエル物語』の非凡な著者がまことに高く評價したものであつたが、今では禁酒會とやら言ふものに迫害されて、日に日に荒れる一方である。ジェローム・ニコラ・セシャルはその苗字によつて定められた宿命を健氣にも固く守り、(譯者曰、セシャルとは乾人かはきとの謂なり)止めどのない渴かはきをいだく男であつた。妻君が久しい間この激情を適度に抑へて來たのだが、思へば葡萄のつぶし汁を熊が愛好するといふのはまことに自然なことで、嘗てシャトوبرリヤン氏なども亞米利加大陸の本物の熊に就てその事實を認めてゐる。さてまた哲人の言葉にも、若い頃の癖は年寄つてから強く再生する、などとあるが、セシャルはこの精神法則を見事に實證して、年をとればとるほど飲み好きになるのであつた。彼の激情がいかに熊らしい彼の容貌の上に顯著な特徴を残すやうになつた。即ち鼻は隆々としてその形大文字のAの如く、三つの砲身を積重ねたるが如く、兩の頬は筋目がついて、宛然葡萄の葉そつくりで、その一面に或は莖色、或は茜色、或はしばしば雑色の突起をさへ具へてゐた。何のことはない、異形の松露トリュフを秋の葡萄の枝葉で蓋つたやうなものであつた。雪の積つた茂みのやうな太い兩の眉毛の下に隠された小さい灰色の眼には吝嗇漢らしい惡計みが光り輝き、それが彼のうちのすべてを、父性愛をさへ、消してしまつてゐた。臺なしにして

ゐた。酔つた時でもその眼の勢に變りはなかつた。頭は禿げて天邊が露出し、周邊にだけ胡麻鹽の縮れ毛がなほ残つてゐて、ラ・フォンテーヌの『物語』にあるコルドリエ僧を想起させるものがあつた。背は低く、腹は太り、その恰好はちやうど油は多く消費しても燈心はあまり減らないといふあの昔の燈明壺のやうであつた。いや實際、何事に於ても過度といふことは銘々人間の體に備はつた本來の特徴を發揮させるものであるが、酩酊も勉強と同じで、肥つた人間をますます太くし、瘦せた人間をますます細くするものである。ジェローム・ニコラ・セシャルは三十年一日の如く、素敵な憲兵用の三角帽を被つてゐる。どこかの田舎へでも行けば町の鼓手の頭の上に乗つかつてゐるのが今もなほ見付からうといふ代物である。チヨッキとズボンとは緑色がかつたビロードであつた。それからなほ茶褐色のフロックと、染織の木綿の靴下と、銀の金具のついた短靴とをはいてゐた。この服裝は、成上りの町人の姿になほ昔日の勞働者らしい佻が残つてゐるといつた風のものであつたが、それが如何にも彼の惡徳と習癖とにふさはしく、如何にもよく彼の生活を現はしてゐたから、この男はこのままの服裝で生れ出たのかと思はせる程であつた。誰しもこの男のことを想へば直ぐにこの衣裳を想像するのは丁度玉葱を想へばすぐにその皮を想像するのと同じであつた。

さてこの老印刷家は久しい以前からその盲目的な貪慾心の極限を示すことがなかつたが、彼の代讓りの一伍一什を見るならば彼の性格もおのづと判明しよう。息子がデイド兄弟といふ言はば大きな學校からさまざまな知識を得て歸つたに違ひないのに、爺父はこの息子とひとついい商賣をしでかしてやらうと

考へて、随分前から案を練つてゐるのであつた。爺父がうまい商賣をすれば息子がまづい商賣をするこ
とになるのはお定りである。ところが、この先生にとつては、商賣には息子も爺父もないのであつた。
初めの間こそダヴッドを己れの一人子として見てゐたが、後には自分と利害の相反する生れながらの買
受人として見るやうになつた。爺父は高く賣り込んでやらうと思つてゐる。息子のダヴッドは安く買は
ねはと思つてゐる。かくて息子は爺父にとつて必勝を期すべき仇敵となつた。このやうな個人の利害に
於ける感情のうつりかはりは、教養の高いひとびとの場合には緩徐に、蜿蜒に、それとなく行はれるの
が常であるが、この古熊の場合は急速、直接であつて、それによつて狡猾な飽醉術がどれ程習ひ立ての
印刷術よりも上手であるかが如實に示されるのであつた。

息子が着くと、親父は息子に示すに狡者がいいかもを引掛けようとする時のやうな愛想よさを以てし
た。その遇ひ方は愛人に對するやうで、手を貸すやら、泥のつかない足の置場を教へるやら、家人に命
じて寢床を温めさせるやら、火をつけさせるやら、夕食の準備をさせるやら、それはそれは大變であつ
た。さてその翌日、潤澤な食時のあひだに息子を酔はせて置いてから、ジェローム・ニコラ・セシャルは
したたか酒に酔つた様子で、「商賣の相談をしよう。」と切出した。この言葉はハッ、ハッと二つの吃逆の
間にはさまれて實に奇妙に吐き出されたので、これを聞いたダヴッドは、商賣のことは明日にまはして
ほしいと懇願した。しかし流石に古熊は酩酊をたくみに利用して、久しい前から構へてゐたこの一戦を
いつかな中止しさうでなかつた。それに、自分も重荷を五十年も背負つてやつて來たのだから、もうこ